

「キリストと御使いの励まし」

ダニエル書 10 : 15 - 20

February.14.2020

**ダニエル 10 : 15 - 20 (パワポ)**

**Preface**

ダニエルは、70年ぶりに故郷エルサレムに帰還した5万の同胞の民たちが苦境に陥っているという知らせを聞き、21日間の断食祈禱を行っていました。

礼拝の民として、まず、帰還したイスラエルの民たちが、取り組んだのが神殿再建でした。

何よりもまず、すべての生活の礎でもあり、また、イスラエルの民がイスラエルの民であるという理由でもあり、アイデンティティーでもある礼拝を献げる場である神殿再建に取り組みました。

正に、神に礼拝を献げる場である神殿再建こそ、帰還の最も大きな目的だったわけです。

しかし、この神殿の土台が築かれた時から、本格的な妨害工作が始まり、神殿建築作業が16年間もの間停滞してしまいました。

帰還したイスラエルの民たちが故郷を復興させ、また復興の象徴でもある神殿建築が着々と進められていくことに不快感を示したサマリヤ人を始めとするその地の民たちが武力行使も厭わない妨害活動を始めたわけです。

何よりも、彼らの妨害工作の最も大きな特徴は、ペルシア帝国の有力者や権力者に対してのロビー活動でした。

以前も見ましたが、もう一度、エズラ書を見てみたいと思います。

**Part One**

**エズラ記 4 : 4 - 24 (パワポ)**

サマリヤ人たちのペルシア帝国へのロビー活動が功を奏し、いよいよエルサレム復興の核であった神殿再建工事は、中止へと追い込まれました。

そして、帰還した5万の民たちは、16年間もの間、苦汁をなめるような生活をせざるを得なくなりました。

16年間と簡単に言ってしまうのですが、それはそれは長い時間です。

私が土浦めぐみ教会で青年主事として2004年から11年間働かせていた

だき、3年間のブランクの後、帰ってきて2年半、合計16年ちょっとが経ちましたが、それはそれは長い時間です。

まだたった16年しか経っていないのかと思うほどに、長い時間です。

1週間が、大学生の頃の2、3ヶ月に匹敵するほどに感じる濃密で長い16年間でした。

この長い16年間という時間を、イスラエルの民たちは、自分たちがイスラエル民族であるという正にアイデンティティー、存在理由であるものを奪われた状況で、16年間もの時間を過ごしました。

故郷エルサレムに帰還しようとした時、確かに不安はあったけれどもそれ以上に期待と希望を胸いっぱい膨らませて帰ってきた故郷の地、思っていた以上に荒れ果て、ここからどうやって復興を成し遂げていこうかという果てしない思いが瞬間胸によぎりはしたものの、「大丈夫、ダニエル様の祈りに支えられ、神様の導きとお守りの中、ここまでやって来たんだから！共に働き、助けてくださる神様を信じてやっていこう！」と、心を奮い立たせて、ゼルバベルやヨシュアという一緒に帰還したリーダーたちと協力して神殿再建に取り組みしました。

その結果、やっとの思いで神殿の礎まで築き、歓喜に包まれ、大喜びで賛美を主なる神様に献げました。

### エズラ記3：10－11（パワポ）

ソロモンの時代の規格外の立派な神殿に比べれば、小さなものかもしれないけれども、自分たちがやれる限り精いっぱいの力と財を用いて据えた礎を前にして、「やっぱり、私たちの成そうとしていたことは主に導かれていることだし、導かれているし、主の御旨に合うことなんだ！私達は、礼拝の民としてのアイデンティティーを復興させる大きな第一歩を踏み出すことが出来た！」と、5万人の民、全員が大喜びして、主なる神様を褒めたたえました。

しかし、そうは問屋が卸さないとはばかりに、執拗な妨害工作が始まり、意に反する状況が続き、気力も続かず、いつのまにか信仰が折れ、礼拝の民であるというアイデンティティーも揺るぎ、暗くて長いトンネルにすることが日常になって、トンネルにいることさえも忘れてしまうような希望を抱くことの出来ない16年間を過ごしました。

帰還した同胞の民たちが妨害活動に苦しんでいるという知らせを聞いたダニエルは、胸を打ちながら、90歳という高齢であるにもかかわらず、命を懸けた一世一代の断食祈禱に入ったわけです。

## Part Two

ここでひとつ、私達が知っておきたいことがあります。

それは、礼拝の民が、礼拝の民として生きようとする時、妨害が入ることは世の常だということです。

この事を、ダニエルも経験しましたし、今、イスラエルの民たちが経験しています。

どの時代、どの国、どんな事情があっても、礼拝の民が、礼拝の民として生きようとするに、妨害があることは、この世の最も端的な霊的特徴の内の一つだとも言えるでしょう。

経済活動、社会活動、政治活動、教育活動、健康活動、自己啓発活動、イデオロギーや思想、ありとあらゆる関係を構築するための活動、人の織り成すそのすべての活動を用いて、何としてでも、まことの神を礼拝することを妨げようとする輩がいることをダニエル書の10章は、私たちに教えてくれます。

聖書は神の国について教えますが、神の国の本体は、神を礼拝することです。

黙示録に天の御国の様子が記されていますが、その真ん中にあるのが、父なる神と御子なるイエスを中心にして、聖霊なる神様の濁り一つない満たしに満たされた人を始めとする、ありとあらゆる被造物の礼拝です。

つまり、神の国の最も端的な特徴は、すべての領域が礼拝であるということです。

使徒パウロは、自身が書いた手紙の中で、礼拝を私達の人生のすべての領域に回復させられ、回復させることこそが、神の民となった証であり、印だと言います。

と同時に、この礼拝を回復させる行為こそ、私達の**最たる霊的戦いの場**であり、この世と調子を合わせないことだとも教えてくれます。

### ローマ人への手紙12：1-2 (パウロ)

神を礼拝することによってのみ、何が神に喜ばれ、何が良いことで、何が完全で、何が神のみ心に適うことなのかを見分ける霊的洞察力が与えられます。

それゆえに、神に反する輩は、礼拝を妨げようと全力を尽くします。

だから使徒パウロは、一つ所に集まり、祈り、賛美し、御言葉を聞き、財を献

げ、褒めたたえる限られた時間と空間だけが礼拝なのではなく、私たちのすべての領域が礼拝であると教えるわけです

要するに、この世界は何を失った世界かと言いますと、礼拝を失った世界だということです。

唯一まことの神を礼拝しないことが一般常識であり、唯一まことの神を礼拝しないことが利益であり、唯一まことの神を礼拝しないことが自由であり、唯一まことの神を礼拝しないことが理性的であり、唯一まことの神を礼拝しないことが信仰的であり、唯一まことの神を礼拝しないことが科学的であり、唯一まことの神を礼拝しないことこそが人が人らしくあれると教える世界です。

そして、それこそ、人に相応しい世界だと導き、染め、支配なんかできないにもかかわらず、あたかも支配しているかのように見せかけている輩がいます。

その輩の張本人こそが、ダニエル書10章に登場してくる、ペルシアの国の君、またはギリシアの国の君と言われるサタン、悪霊どもです。

ダニエルは、礼拝の場を全力で妨げようとする力は、人を根拠にしているのではなく、人を道具として用いているサタンや悪霊どもであることを、断食祈禱を通してはっきりと目に見える形で教えられました。

ダニエルはここまで、その人生のすべての領域において、礼拝を体現しようと生きてきましたが、ことごとく妨害が入りました。

そして、その妨害の道具として目に見える形で現れたのは、いつも人でしたが、その背後に、その妨害行為を策略し操作している輩の存在を知らなかったわけではありませんでしたが、今回の祈りの応答を通して、はっきりと目に見える形で示されました。

新約聖書で、使徒パウロは、私達の歩みは肉にある歩みではあるけれども、肉に従う戦いではなく、神のために、輩の要塞を打ち倒す歩みであると教えます。

### **第二コリント10：3-5 (パウロ)**

神のためにサタンの要塞を打ち倒すことが、私達の真の戦いであり、その戦いの武器は、お金でもなく、爆弾でもなく、政治力でもなく、資格でもなく、人生をうまく生き抜く力でもなく、神を礼拝することであるということを、確かに、パウロは知り、ダニエルも知りました。

ダニエル書10章に戻ってみますと、イスラエルの民たちの受けている妨害工作が、ただの住民たちの妨害工作ではなく、すべての物事の本質である礼拝行為をへし折ろうとする霊的総攻撃であることが、見えてきます。

### ダニエル10：20 (パワポ)

ダニエルのところに祈りの応答を伝えに来た御使いガブリエルは、祈りの応答をダニエルに伝えに来ることだけが目的ではなく、ペルシアの国の君と戦うためでもあると言います。

つまり、先ほど見ましたエルサレムの神殿再建を妨害しようとしたサマリヤ人たちのロビー活動にまんまと乗っかってしまい、神殿再建の中止を命じたペルシア帝国の権力者たちの行為は、人間を道具として用いて、全力を尽くして礼拝を献げる神殿再建を妨げようとした、サタン悪霊どもの仕業だと言うのです。

天使ガブリエルは、ダニエルの祈りに答えて、「ペルシアの国の君と名乗る悪霊どもに、実際に戦いに出て行くから任せておきなさい！」と、言うわけです。

で、この戦いの結果どうなったのかと言いますと、

### エズラ6：6－16 (パワポ)

天使ガブリエルとペルシアの国の君との戦いは、時の王をも巻き込みながら神殿を完成させるという形で、見事、天使ガブリエルに軍配が下りました。

いや、もっと言いますと、父なる神を礼拝するという、物事の本質における天の御使いの戦いが、神に反逆し墮天使となった悪霊どもに負けることはありません。

そこには、必ず勝利のみが約束されています。

と言うのも、主イエス・キリストの贖いにより、すべてがもうすでに勝利しているからです。

ただし、そこには、この目に見える世界で、肉をもって生きる私達にすれば、16年間という忍耐が求められる長い年月が掛かることもあります。

なぜならば、神様が私達に、祈りを教え、御言葉を教え、忍耐を教え、苦い経験を通して、何が神に喜ばれ、何が良いことで、何が完全で、何が神のみ心に適うことなのかを見分ける霊的洞察力を養わせ、真の礼拝者へと変えるためです。

また、ダニエル書10章を見ますと、同じことが2回繰り返されていることがあります。

それは、主イエス・キリストのご臨在とその圧倒的なご威光の前に、ぶっ倒れて気を失ってしまうダニエルと、その直後に御使いガブリエルによって、励まされ力づけられるということです。

一度目は、ダニエル書10：4－11で、2度目は、今日の聖書箇所ダニエル書10：15－19で、です。

### **ダニエル書10：15－19 (パワポ)**

(人のような姿をした方→イエス・キリスト　人のように見える方→ガブリエル)

主イエスの圧倒的なご臨在の前に、すべての力が抜けてしまったダニエルは、御使いガブリエルによって、「特別に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」と語り掛けられながら、奮い立たされました。

私達のクリスチャンの歩みは、確かに主イエス様と共に歩む、この世の何物をもってしても比較の出来ない崇高で、高尚な歩みですが、「もうダメだ！」と倒れてしまうことがあります。

すべての罪は赦されましたが、未だに罪人であるがために、イエス様が共にいてくださることが負担に思えて倒れてしまうことがあります。

しかし必ず、ガブリエルのような御使いを送ってくださり、「安心なさい、愛されている人よ！」と、励まし、やがてキリストの身丈にまで成長させ、完成させてくださいます。ていただく人生です。

主イエス様と共に歩むことは、気を失ってしまうほどの大変な道ではありませんが、唯一無二の崇高で、高尚で、壮大で、堂々たる道です。

どんなに大変だとしても、この事実には揺るぎはありません。

だからイエス様は、確信をもってこんなことをおっしゃいました。

### **マタイの福音書16：24－26 (パワポ)**

主イエスと共に歩む道は、十字架を背負って行く道であり、時には気を失うほどの道ではありますが、主イエス様ご自身が歩まれた道もそうであったように、栄光の道であります。

そこには、まことのいのちがあり、まことの良いものがあり、まことの永遠がある道です。

帰還したイスラエルの民たちも、ダニエルも、主イエス様に従うために、妨害工作という重い十字架を担いましたが、そこには勝利があり、栄光がありました。

そして、何よりも、主イエス様と天の御使いの励ましがありません。

私達の歩みには、一見するとその理由もわからなければ、理解も出来ない妨害が散財しています。

その妨害が、私達の信仰をへし折り、もうダメだと思わせますが、主は、時が満ちると必ずと言っていい程、助けを与えてくださり、道を開いてくださいます。

私にとって、先週1週間は、正に、妨害に満ちた1週間のように感じました。

火曜日の朝、出勤しようとシャワーを浴びている時、また、ぎっくり腰になってしまい、立てなくなっていました。

やらなくちゃいけないことは山積しているし、しかもこの難しい聖書箇所から説教をするための準備も控えていて、正直、もう気持ちはパニックでした。

スタッフにもまた迷惑はかけるし、家でうっ、うって言いながら寝っ転がっていると妻には鬱陶しがられるだろうし、ただでさえ、息も絶え絶えのところ、もう体も気持ちも、(まだまだこれから先底はあると思うのですが、)現時点での底を突いたような思いになって、妻にも子供たちにも、質の悪い八つ当たりまでして、もうちょっとダメでした。

でも、何とか早朝に置き、聖書を開き、説教準備をしていく中で、全くもって気持ちは鬱々とはしているんですが、「これも妨害工作の一つだろうし、主イエス様の前に力尽きて息も出来ないようなことだろうし、それと同時に、それでも説教準備が出来ているということは、天使ガブリエルが、恐れるな、安心せよ、強くあれと励ましてくれているのかな…」と、微かながらも思えることが出来て、今、こうしてここに立っています。

### Conclusion

主イエス様ご自身も、人のからだをまとしてこの地上にいらっしやり、いよいよ十字架への道を歩もうとした時、意識を失うほどの苦痛と身もだえをご経験されました。

その時に、やってきて励ましてくれたのが、これまた御使いなんです。

**ルカの福音書 22 : 41 - 44 (パウロ)**

イエス様も、言葉で言い表すことの出来ない苦しみと悪霊どもの総攻撃を受

けて、血のしずくのような汗を滴らせる程でしたが、御使いが来て、力づけられたことをご経験されました。

私達は、私達の人生のすべての領域が礼拝へと変えられる過程にあって、執拗な妨害工作もあれば、執拗な誘惑もあれば、執拗な攻撃もありますが、その時ごとに、主は御使いを送り、励まし、力づけてくださいます。

この礼拝が終わって、一步外に出た時、また躓かせようとする攻撃があるかもしれません。

が、それも、一過程だと、そして、必ず助けがあると信じて大丈夫です。

神様は、私達の祈りと礼拝に、天上世界を震わせながら、答えてくださいます。

だから、遜り、なおも、信じて祈り、なおも、私達の人生の全領域を礼拝へと昇華させていただきましょう。

そのために、主が助けてくださいますし、主が成してくださいます。

お祈りいたします。

祝祷：ローマ書 12：1b-2a